

本論文は

世界経済評論 2022年3/4月号

(2022年3月発行)

掲載の記事です



世界経済評論 定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込 17%
送料無料
OFF



富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読
期間中

デジタル版バックナンバー読み放題!!



世界経済評論 定期購読

0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp
雑誌のオンライン書店

鹿の精管切除

2020年の春コロナウイルスが世界的に広がり始めてしばらくすると、野生動物が世界の市街や郊外に現れた。

いわく、アデレード市の通りにカンガルーが現れてびょんびょん飛んだ。カンガルーといえばオーストラリアだから当たり前だと思うかもしれないが、同国五番目の大都市の真ん中でこの動物がこんなことは初めて。住民がざわざわ出回ることがなくなったためだ。

いわく、ロンドンの団地にダマジカ（fallow deer）の群が出現した。ダマジカは日本の鹿に似ているが、角が広がり掌状（palmate）を作る。サンティアゴにはピューマが出現した。

サンフランシスコでは金門橋の界限などにコヨーテが現れた。北アメリカ在来の、狼よりひと回り小さいこの犬科の動物は、伝統的に「信頼できぬ動物」として嫌悪され、狼と同じく迫害されてきた。そのため都市近辺では消えて久しかった。

リマのPlaya Agua Dulce（「甘水が浜」）は通常海水浴場で鯨詰めだが、2020年3月コロナで大統領が緊急事態を宣言、市民の外出を禁じると、ほどなく千鳥や鰺刺など海鳥の大群に覆われた。

一方的な関係

似た報告は他にもいくつもあったが、中で、ベニスでは運河や湾に海豚が出現、泳ぎ回るようになった——という報告は似非だと分かった。しかし、1年後の春には母子連れ添いらしい二頭の海豚が泳ぎ回る様子が確認された。

こうしたことがニュースになるのは、人間と野生動物の一方的な関係を気にしている人たちが多いからに違いない。人間とその活動が増大するとともに動物に圧力がかかる。そうした時にコロナで街角に人影がうすくなると隠れ潜んでいた動物が出てくる。一縷の希望が出てくる。



佐藤 紘彰

ことは深刻だ。2019年、国連は人間のやっていることをそのまま続ければ向こう20~30年間に動植物を合わせて100万種（species）が絶滅すると報告した。こういう危惧は昨今のものではない。アメリカでは権威ある全米研究評議会が「生物が毎日1種ずつ死滅している」と結論したのは1970年代だったし、法制では1900年のLacey Actに遡る。同法は初めて自然を保護しようとした。しかし事態は悪化し続け、1973年には「絶滅危惧種法（Endangered Species Act, ESA）」を成立させた。

狼の再導入

ESAは絶滅に近い動物を保護しただけでなく、その増殖を奨励した。なかで狼は1960年代の半ばまで政府が賞金を出して殺戮を奨励したためアメリカの「陸続きの48州」（アラスカとハワイを除くアメリカ）で生息しなくなっていたが、その「再導入」をすらしめた。

しかし、狼は人間活動に反するとしてこれを抹殺しようとする動きも根強い。トランプが2020年の大統領選挙の直前、五大湖近辺の狼の保護を撤廃したのはこれに应ずるもので、その数週間内にウィスコンシン州では狼の射殺が倍増した。ついで、五大湖州から外れるモンタナ州では2021年知事に就任したばかりのGreg Gianforteが狼削減規制の緩和を大きくした。

こうして絶滅危惧の対象の動物ですら危ないが、そうでない動物の大半も絶えず圧力のもとにある。その一つ、人間の保護で数が回復した動物の中で鹿を考えてみよう。

スタテン・アイランド

多くの住むニューヨーク市のスタテン・アイラ

ンドでは、2016年、鹿の「精管切除（vasectomy）」作業を始めた。スタテン・アイランドはニューヨーク市を成す5つのboroughsのうちマンハッタン島の南西、ブルックリンの西に位置する島で、面積はマンハッタンのほぼ3倍、人口は170万人に対し50万以下である。

この島には長いこと鹿はいなかったらしいが、1991年、初めて鹿を見たという住民の報告がある。島とその北西に沿うニュージャージー州の間にあるArthur Killと呼ばれる水路を泳ぎ渡ってきたらしい。2000年ごろから増え出し、2016～2017年には2000頭を超えたと推定される。増加とともに「深刻な問題」と見なされるようになった。そこで精管切除を導入、その結果2019～2020年にはほぼ25%減の1550頭になった。

この鹿は北アメリカ大陸の東部に普通に見られるwhite-tailed deerで、ぼくの姪の暖子が夫のマンハッタン赴任に伴いマンハッタンからは東北にあるMamaroneckに住み始めると、「庭にもやってくる！」と喜んで早速写真を撮って送ってくれた鹿である。名は向こう向きに走る時にひょんと上げた尾が白いことによる。仮に「白尾鹿」と呼ぶ。

アメリカには、その他にmule deer（驢馬に似て耳が大きいのでそう呼ばれるので、仮に「驢馬鹿」）など何種類もの鹿がいるが、歴史的には「白尾鹿」はほぼ全体の3分の2を占めてきた。

鹿は、現在米国と呼ばれる地域には、ヨーロッパ人移民が始まる前は4000万頭が棲息したと推定されるが、以後減少を始め、独立戦争後の移民の増大で急速に減少した。特に1800年から1900年までに人口が14倍以上増えるなかで動物の乱獲が続いたため、鹿も20世紀の初めまでには全国30万頭以下の「根絶」に直面した。

しかしその後の保護と増殖の結果、2000年頃までにはヨーロッパ人移民以前の4000万頭に近い数に達したが、その後減少し始めている。特に

「驢馬鹿」その他の鹿は1960年ごろからの減少は著しい。

自然区

スタテン・アイランドで白尾鹿が最近増えたのは、この島には多くの自然保護区が設けられているせいもあるだろう。しかし、それは人間にとって望ましいことではないか。とすればなぜ白尾鹿の精管切除に雄としての機能を切断するような、ひどいことをやり始めたのか。これについて、ジャーナリストBrooke Jarvisが週刊誌The New Yorker（2021年11月8日号）で取り上げている。

まず、自然保護区の設定について、これは「自然は保護区では人間の干渉なく機能でき、人間は自分以外のことは自然に関心なく機能できるとの想定に基づいている」が、これは現実に反すると論じているとするHolly Doremus環境法学者の議論を引く。つまり、二つは交わらざるを得ないという。

次に、（少なくとも西欧では）19世紀に「清潔な市」という概念が生まれ、それが野生動物を好ましい、許容できるもの（pets）と、そうでないもの（pests）とする分ける考えを生んだ。

そのせいか、「人間と自然の均衡の回復」がよく言われるが、その意味が明確でないとJarvisは指摘する。これに対して、たとえばPatrick Mooreは「地上の植物をめっちゃめっちゃにする点では人間の方が鹿よりはるかに悪い。そんな時に間引きや断種をやるのは人間の傲慢と責任回避を奇妙に併せた考え」と言う。Mooreはニューヨーク市で傷ついた野生動物は鹿からカナダガン、はたまた栗鼠まで無料で治療する人である。

間引き（culls）というのは、この地区では鹿は何頭まで許すが残りは殺せとする地域があることを指す。

さとう ひろあき 翻訳家、コラムニスト在NY